



Title	「分かる」と「分からない」の間
Author(s)	西川, 勝
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 152-167
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55657
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

INTERVIEW 01

Masaru Nishikawa × Naoki Homma

「分かる」と「分からない」の間

西川 勝

聞き手：本間直樹

PROFILE

西川 勝 | Masaru Nishikawa

臨床部門 特任教授

看護師として、精神科看護、血液透析看護、高齢者介護、認知症介護に従事してきた。臨床看護の哲学的展開を目指して臨床哲学を学ぶ。現在は「認知症ケア」に関わるコミュニケーションの研究・実践を進行中。

看護師から大学教員へ

—— 西川さんはもともと看護師をされていましたね。まずは CSCD に来られた経緯をお聞かせください。

私は以前、精神科病棟や人工血液透析などの臨床現場に 20 年ほどおり、2003 年当時、京都市長寿すこやかセンターの研究員をしていました。そこは高齢者やその家族、専門職向けの相談や、認知症に関する理解の普及・啓発をめざした講座や研修などの活動に取り組んでいるところで、認知症介護研究会の代表をしていただいていた鷺田清一先生の勧めで職場を介護老人保健施設から京都伏見の認知症のデイサービスに変わるようになりました。ところが給料が安すぎて生活していけなくなり、鷺田先生に相談しましたところ「じゃあ、大学に来るか？」と言われたのです。「はい」とふたつ返事で答えたのですが、その時は大学の保健センターの看護師として雇ってもらえるのかな、と思っていました。

—— 詳しい説明も聞かずに辞めてしまったのですか (笑)。

「本などを读んだり書いたりする時間ができるよ」と言われたので、給料は安くても夜勤などはないだろうと思っていました。実際に初代センター長の中岡成文先生から「実は今度僕がセンター長になるところに西川さんが来るのですよ」と言われたのは CSCD ができる直前、2005 年の 3 月だったと思います。「特任准教授で」という話を聞いて、ひっくり返りました。それまでコミュニケーションデザイン・センターの「コ」の字も知らなかったのですから (笑)。

最初の 1 年くらいは授業もなかったので、朝、出勤するとひたすら本を読む日々でした。時間も結構自由になったので、大阪府立精神医療センターなどの講師依頼も引き受けました。ただし、授業の練習にもなると思って 1 ヶ月間、現場の実習に行かせてもらうことを条件にしたのです。

—— 精神科病棟は初めてではなかったと思いますが、看護師ではない立場で行かれてどうでしたか。

それがすごく面白かったのです。発達障害の子どもの入院施設に行くと自閉症の子と付き合ったりしたことは、とても刺激的でした。その経験を直接授業に使ったりしたわけではありませんが、振り返ってみると、とにかく現場に行くと活動してから話をするというスタイルがこの経験から生まれたように思います。そして授業が始まったのが 2006 年。「ディスコミュニケーションの理論と実践」という集中講義を 3 日間したのが初めてです。ゆったりした時間の中で皆の動きを見たり、イベントにも参画しました。たとえばアート部門の木ノ下智恵子さんに誘われて、高嶺正さんというアーティストと対談したことがありました。高嶺さんはその世界ではすごく有名なアーティストだったのですが、僕はアートなんて全然知らなかったし、基本

的に背景をあまり理解する気がないこともあって、たくさん渡された高嶺さんの作品ビデオだけ観て、当日会場に行ったら「浅田彰」とか著名な思想家が難しそうにしゃべっていたりして、自分で大丈夫かな？と思いながら参加したことを覚えています。

それに対して木ノ下さんから「立派だ」とは言われなかったけれど「面白い」とは言われませんでした。それは当たり前と言えば当たり前ですね。僕はアート評論の言葉を持っていないし、アーティストの言葉も持ってないから、いわゆる看護師と臨床哲学の言葉でしゃべるしかないわけで、その異色の組み合わせが新鮮に見えたのでしょう。

当初は、精神科での経験や認知症の知識を土台にして授業をしたほうがいいのかと思っていたのですが、アート部門の木ノ下智恵子さんが企画されるイベントなどを通してアーティストたちと付き合ったりしているうちに、別のやり方を考えたほうがいいのではないかと思うようになりました。それで「ディスコミュニケーション」というキーワードを考えたのです。ディスコミュニケーションとは、自分の看護師の経験の中で常に患者さんとの間で巻き込まれていた状態で、「上手く伝え合えない、分かり合えなかったら意味がない」と言ったら自分の看護師人生が全部無駄になるから、それだけは何とかしたい、考え直さなくてはいけないと思っていたわけです。「伝わらない、分かり合えない」、そういう関係にも何か意味はあるはずだと。

その答えを自分が持っているわけではなかったのですが、コミュニケーション不全を解決するというだけではなく、コミュニケーション不全の中を生きることを考えていきたい。そもそも大学教員になろうと思っていたわけでも、大学教員になるための訓練を受けたわけでも、確固たる専門的背景があって授業ができるわけでもない、自分の立ち位置もあやふやな中で、今までとは違う自分の形でしゃべれたらと思ったのです。

—— その「分かり合えない」ということについて、看護師をされていた時からそういう言葉として問題意識を持っていましたか。分かり合えないことはたくさんあるわけですよね。特に精神科病棟では。

いくら言っても分かってもらえないし、向こうの言うことも分からないといったことは常に感じていたのですけれども、そこに積極的な意味を見いだすことができると思い始めたのは、やはり臨床哲学との出会いが大きいですよね。看護の分野では「患者さんの全人的理解」という用語がよく使われるのですが、それを巡って長期にわたって喧々諤々と議論したこともありました。

—— そういう経験が一つの原点としてあったということですね。

看護現場で「悪い看護」として問題視されていたものも、臨床哲学との出会いの中で少し違う角度から見られるようになった。「理解」というものが一つの支配の方法であったり、「看護する」ということが相手に対する暴力的な介入であったりという、通常の看護界では絶対ない視点からものを考える経験をしたことで、自分の20年近い看護師としての人生でモヤモヤしていたものが言葉になってきたのではないかと思います。文章を書いたり言葉にすることも臨床

哲学と出会って鍛えられたもので、それまでは自分の実践なり考えていることを言葉にすることはありませんでした。哲学には哲学の中での共通言語があると思うのですが、それを持っていない看護分野の者が、逆に看護の言葉を全然持っていない哲学の人たちと話し合うという経験に、僕はすごく影響を受けたのです。

臨床部門の挑戦

— お話を伺っていると、西川さんがやっておられることは看護研究ではないですね。一方で、CSCDの臨床部門にはもう一人、看護学を専門とする西村ユミさんがおられました。西川さんから西村さんはどう見えて、どんなお話をされましたか。

CSCDで同僚になる以前、彼女が博士論文を書いている最中に臨床哲学研究会で発表をされた時のこと。彼女はインタビューをもとに論文を書いておられました。ところが僕は自分のことを書くタイプなので、「なぜ看護実践を書くのに人のことを書くのか？」と、すごく食い下がったことを覚えています。インタビューの形だと相手を対象化して見てしまうし、それによって迷いとか何か生き生きした看護実践がなくなるのではないか。人に話をするということは、ある程度の整合性がないと伝わらないし、やっている行為は外から見たら一つだけけど、自分の内にはさまざまなものがあるわけでしょう。なぜそういう決定をしたのか自分自身で分からないことすらあるわけで、それは自分のことを書くほうが圧倒的に現実に近いような気がして、随分話し合ったことがあります。

— CSCDで一緒になってからはどうですか。ちなみに彼女は2年目に来られましたね。

CSCDでは、看護の話はほとんどしていないと思います。お話したように、僕はインタビューというやり方をどちらかというと冷ややかに見ていたのですが、身体コミュニケーションについて話をされた時には、すごく関心が湧いてきました。

偶然ですけど「contact Gonzo」というパフォーマンス集団と仲が良くなったり、甲谷匡賛さんというALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんのことで舞台芸術の企画をされる志賀玲子さんと一緒に活動するようになり、ダンサーの岩下徹さんとか身体表現分野の人たちともふれあう機会が多くなっていきました。すると、昔、哲学の本でいくら読んでも分からなかった「身体論」について、すごく興味が湧いてきた。今や「身体コミュニケーション」的なことに関心が強いのは、西村さんとの出会いによるものだと思います。

臨床部門の授業は、予めあまり教員同士のミーティングをしないのです。ですからその日になってみないと同僚がどのような授業をするか分からない。同じ授業を繰り返す場合があっても1年ぶりくらいで、お互いどのカードを切ってくるか全然分からない。一回一回の授業が真っさらのスタートなので、学生が受けているのと同じような感じで西村さんの、あるいはもう一

人の同僚の池田光穂さんの授業の影響を受けていく、そんな感じです。

——一緒に授業をしていて膝を打ったこととか、非常にむつかしかったことはありましたか。

池田さんとは最初、喧嘩ばかりしていましたね。要はスタイルの違いなのですが、池田さんはものすごく丹念に調べてきっちりと授業をする人なので、僕のように思いつきでされると腹が立つのだらうと思います。西村さんが着任するまでほとんど対決姿勢だったのですが、西村さんが上手い具合に合わせてくれ、辞められる頃には池田さんと二人でも大丈夫だなと思うくらいになっていました。

——それは何が変わったのでしょうか。

一番の変化は、池田さんのある部分に対して敬意を持つようになったことです。最初から知識の多さはすごいと思っていたのですが、何よりも興味の持ち方がすごい。たとえば、「この前行ってきたところでこういうお婆ちゃんと会いました」「その時こんなことをしました」といった何の準備もせずに話した自分の体験にもものすごく面白がってくれる。ところが、事前に勉強した本をもとに授業をしようとする、めちゃくちゃ怒りだす。

——面白い(笑)。池田さんらしいですね。

勉強したらつい権威的にしゃべってしまいますから「そういう嘘の権威に騙されるな」と怒られるのですが、要するに勉強が足りないということなのでしょう。たとえば「フーコーという人はこう言っています」と言うと、「フーコーのことなんかよく分かっていないくせに」と言われるわけです。

そうした中で、ダンサーの佐久間新さんがペットボトルを頭の上に載せてされた身体コミュニケーションについての授業(ワークショップ)があり、池田さんはそれにはまってしまって、われわれもしばらく頭の上にペットボトルを載せて授業を行いました。

——「現場力と実践知」という授業科目でしたね。

学生への授業だけでなく臨床部門の3人でいくつかの大学に対してFD(Faculty Development)の講習をした時もペットボトルを載せてやりました。これにはいろいろな解釈があるだらうと思いますが、「もっと集中して」といくら言葉で言っても心はままならないものです。しかし「ペットボトルを頭に載せてみてください」と言われると、「落としたりアカン」とは一言も言っていないのに、「落とさないように」と皆一生懸命に取り組むんです。載せた途端に気持ちもシャンとなってくる。いちいち言葉で相手の知性に訴えかけなくても、ペットボトルを載せるという行為一つでその人の在り方や振る舞いを変えられるというところが面白いでしょう。

他にももっといろいろな試みもしたと思います。そういうふうアイデアが次々と浮かんでくるところや、興味を持ったものへの食いつき方、それにしばらく夢中になって遊んでいる池田さんの姿はピカイチだと思います。

—— 西川さんはそうではないのですか。

僕は徐々に「面白いかもしれない」と思い始めるタイプ。一方で、西村さんのさまざまな身体論についての知識理論と、授業のしなやかさのギャップにもものすごく驚きました。そういう二人に刺激されて「こういうものも面白いかもね」と思ってやってきたのです。

グループワークという授業の形

—— 学生から授業はどう見えていると思いますか。

最初の頃は「訳が分かりません」という感じでした。3人が事前に相談もせずに授業をやって、途中で議論を始めるでしょう。すると学生としては教えてもらえるつもりで来ているのに、先生がそれぞれ違うことを言う。主担当の教員がボロクソに言われている現場などを見ていたら訳が分からなくなるでしょう。「私たちは何をどう考えたらいいんですか?」「この授業の落としどころは何ですか?」「教員同士がもう少し意見を一致させてから授業をしてください」といったブーイングもありましたが、それに応えて「みんなで話し合おう」とはならなかった。

教員が入って行うグループワークにしても、池田さんが入っているグループと僕が入っているグループでは、同じテーマなのに全然違ったことを考えて帰ることになるわけです。ですから授業としての品質の均一性のようなものは保証しておらず、運次第です。

—— 異質性と偶然性を保証しているのですね (笑)。私も最初の2～3年はビデオを回しながら一緒にいたので思い出すが、授業では順番だけが決まっていて、種は明かさず、オチも分からず、ただ同じ学生に関わっているということだけが唯一の共通項です。やはり学生に助けられた面や学生から学んだ面もあるのではないのでしょうか。

僕の場合、あらかじめグループワークのテーマを設定したり、問いを作って授業することがすごく苦手です。哲学カフェでは「問いは一緒に作るもの」というところがあって、テーマを最初から決めることはしません。議論の焦点が明確な問いを作るのは何か不毛な気がするし、僕自身があらかじめ明確な問いなどあまり持っていないのです。人としゃべる中で考えてみたいと思うことが出てきたり、本を読む中で問いの形が明確になっていくタイプなのです。

しかし、CSCDでの授業は最初にグループワークのテーマ、何を話し合ってもらおうかの話題を提示しますので、その最初の問いを作るところが未だにモヤッとしてしまうのです。そこが

授業以外の活動との大きな違いです。

—— 学外ではしないやり方を CSCD の授業でされるのはなぜですか。

それが方法論だと思っているからです。すべての授業をそういうやり方でやっています。時々どうしても問いの形にできなかった時に「テーマだけあげますから、皆で自由に話し合ってください」ということもあります。

—— 一つ事例を挙げてテーマや進め方についてお話いただけますか。

ついこの間のテーマは「自分との付き合い方」でした。これは哲学カフェでもやったテーマなのですが、「付き合い方」というと普通「上司との付き合い方」とか「同僚との付き合い方」とか、自分以外の他者とコミュニケーションをとる時に使う言葉です。ところが『『自分との付き合い方』』と言っても、そんなに変な感じがしないのはなぜでしょうか？」と聞いたのです。他にも「自分を責める」「自分を褒める」という表現があるように、「自分」という言葉は主体でもあれば受け手でもある不思議な言葉です。

そこで「われわれは皆それなりに自分と付き合い合っているはずだけれども、どんな付き合い方をしてきたのか、何かエピソードがあれば話してもらいたい。これまでにどうしようかとためらうことや選択することが一度もない人生はないと思うから」と言ったら、結構若い人たちの感性にはまったようで「私、自分が嫌いなのですが、それでも自分と付き合うということなのでしょうか？」などという意見も出て、一気に真剣モードになっていきました。薬学の学生を対象にした必修科目の授業でしたから、学生たちは面白くなかったら本当につまらない顔をするのです。好きで受けている授業ではないから当然と言えば当然です。僕としては半ばやけくそのようにしてやった授業でしたが、すごく面白かったみたいです。自分との付き合い方が確定している人はまだいないわけで、「悩んでいます」と言いながら皆がそれぞれの人生について語り始めた。

そうやって考えると「自分との付き合い方」と言いながら、結局は人との関係に常に巻き込まれているのが自分なのです。「どうしよう、勉強せなアカン。でも遊びたい」「勉強せなアカンと思っているのはなぜ？」「親が勉強しろと言っているし」とか「人から評価されるためには勉強しないとイケないし」とか、自分との付き合い方の中には必ず他者からの目に応えようとする自分がある。これが常に悪いわけではなく、自閉することなく外に開いているからこそ他人が言うことや他人が見る自分が気になるのです。でもそれだけで収まらない何かがある。これを「バランス」というのですが、「これを決めたのはもう一人の別の自分なのか」などと考えていくと「私の中には自分が何人もいます」という発言が出てきたり、ものすごく面白い話になっていきました。

「答え」でなく「問い」を導くために

——「それは授業なのですか？」と学生に聞かれたら、何と答えるのですか。

僕は「問いにしてください」と言っています。「皆さんは少なくとも大学で何か研究的に物事を考えようとしている人ですから、研究する者にとって大事なのは答えではなくて問いですよね？」と言うことにしているのです。知識伝達型のを授業と考えるのであれば、グループワークという形は授業ではありません。あらかじめ答えが用意されている問題を前にしてウンウン唸りながら解くのではなく、何も書かれていないものに答えではなくて問いを書いていくような姿勢が研究的な学問の在り方ではないでしょうか。社会の問いというのは、今まで小、中、高と受けてきた学校教育のように問題が明確ではないし、問いそのものを吟味しないと、答えたからといって必ずしもプラスにはならないと思うのです。

——もう少し踏み込んで、西川さんのいう「問い」とは何ですか。

自分が知りたいこと、考えたいこと、そしてそれが知るに値するか、人とともに考えるに値するかを吟味することが大事だと思うのです。ポンと思いついた何か、あるいは調べれば分かるようなことではなく、本当に自分が知りたいと思っていること。自分にとって価値のある、探求するに足るもの。自分がその時の能力や情熱、あるいは自分の時間というものを費やして惜しまないと考えるものを自分の中で見つけていくこと。それを一緒にやってくれる人がいれば自己満足に陥らずにすむので、授業の中でもできればそうしたいと思っています。

哲学カフェ的にやると「私はこう考えたい」「私はそれとは別にこう考えたい」となかなか一致しません。当たり前なことですけれど、考えたいことが違う人たちをどうやって議論できるようにするかという時には、協働でレベルを変えていかなくてははいけない。一緒に考えたい時には、一気に「人間にとってこの問題は大切だ」というよりも、まず目の前の人を誘わないといけなわけです。「こういう理由で考えるだけの値打ちがあるでしょう」と合理的に説得するやり方もあるだろうし、非常に魅惑的に語って「それは面白そう」と誘うやり方もあるでしょうけれど、そういったことがいわゆるヒューマンコミュニケーション、臨床コミュニケーションのコアになる。問いに答えるだけでは人と人とのコミュニケーションにはならないのです。授業では、コメントの時などにそういうことを断片的にしゃべっています。こういったことは一気に伝えようと思っても無理で、半年受けて何となく分かってもらえたらいいかと思っています。

こういうことを言葉にするために僕は結構何年も考えてきたわけで、それを10分か15分くらいできれいに整理して説明されたり、本にしてポンと渡されたりしても多分わからないでしょう。何度も何度も見たり、参加しているうちに、見え方が何となく違ってくるものがある。それと一緒に、こういうやり方の授業に関しては、あまり言葉で説明するよりも、授業を「面白い」とか「今までと違う」と感じてもらえるように実際にディスカッションを重ねることが

大事なのかなと思います。

—— 今のお話では、本に書いたり授業で説明することは、一つ一つの事柄が持っているもとの体験のコンテキストから一回距離を置いてまとめていることになりませんか。

コンテキストだけではなく、言葉に対する理解も経験の厚みで変わるじゃないですか。「海」という言葉でも、それほど海を見ていなかったり、海水浴で見たりする程度だったら、何十年と海辺で暮らしている人とは、「海」という言葉が喚起するものが全然違いますよね。臨床コミュニケーションでキーワードのように出てくる「身体」についても、経験が言葉を耕していくとか、豊かにしていくわけです。

阪大の学生は言葉の理解にかけては長けている人ばかりなので、小論文やレポートを書かせたらすごく上手い。みんな一気に書くのだけれど、何か類型化されている。一方で、本当にガツンときた経験はなかなか上手く書けないものです。たとえば先ほどのペットボトルを頭に載せてみた経験については、なかなか書けない。だからこそ、そういう経験をしてから議論するという方法がいいのではないかと僕は思うのです。通常は先に理屈を教えて、「じゃあ実際にやってみましょう」というようなやり方が多いですが、そうすると経験が知識で正常化されすぎて、答えがその方向にしか行かない。分からなさがなくなってしまう。でも、分からないものは気になるじゃないですか。その分からない、気になるものを学生にどれだけたっぷり持って帰ってもらうかが大事。するとその後の授業、あるいはどこかでアッと思うようなことがあるかもしれません。

—— 今おっしゃっている「経験」というものは、いわゆる経験科学の「経験」でもないし「経験一般」でもない。言葉やそれ以外のワークを通しての「経験」を臨床部門の教員は全員大切にしているということですか。

そうだと思います。それを明示的に語れるのが西村さんでした。「ドアを開けてこの部屋に入ってくる1分間の様子を細かく思い出して、全部文章化してみましょう」とか、最初「え？」と思うようなことでも実際やってみるとすごいことだと分かってくる。上手い授業だと思います。そこには教育目標というか、今日の授業の目標がある。受講者としては非常にわかりやすいです。

—— それは西川さんにも役に立っていますか。

立っていないですね。いいなとは思いますが、真似しようとは思っていません。

—— それは一つの正解ですね。つまりその授業方法や授業意図を理解することが役に立つというのは、それと対比することで自分が何をしたいのかがくっきり見えてくるという意味だと思うのです。でもそれは仕入れるものではなく、対比の中で常に「自分は何を考えているのだ

ろうか」「自分は教育者としてどうなのだろう」「他の学生や受講者はどうなのだろう」という形で考える空間が生まれる。それを数的にどう捉えるかは別として、そういうことが可能になったということは変化を経験されたことになりませぬ。

考え続け、変わり続ける人に

—— 学生から「自分は何を学んでいて、学んだことが何に活かされるのか？」と問われたら何と答えますか。

学ぶということの意味がよく分からないのですけれど、「考える人になる」とは思います。最近、伝わらないことの面白さとか分からないことの意味について、短い文章をダンスや臨床ケアの文脈の中でちょこちょこ書いています。しかしそれを大学教育の中にどう位置づけるかという視点は、今のところまだ確立できていません。

—— 不思議なことに、アート部門の久保田テツさんも「分からないことの面白さ」ということをずっと言っておられます。それはなぜ大事だと思いますか。

「分からない」という分かり方がある。「そんなこといくら考えたって分かるはずないから考えない」という人や、「分かった、分かった」という人がいます。この「分からない」と「分かる」の両極端に振れた時に、人は多分ものを考えなくなるのです。「分かる」と「分からない」の間で常にものを考えることを「分からない」ということが後押ししてくれる。

—— 考え続けると何がいいのでしょうか。

自分自身が変わるのです。看護師の頃、僕はよく「看護師にアイデンティティはない」と言っていました。医者でもないし、ヘルパーでもない、家族でもない。専門家と非専門家の真ん中です。最近は看護師の社会的なステータスが上がってきていますし、博士もいますから専門職だという意識は高いですけど、僕が精神病院で看護師や看護人と言われていた時には、看護の理論を確立しなくてはいけない、「看護学」が必要だと言われていたけれど、「看護師が何者かになることくらい恐ろしいことはない」とずっと言い続けてきたのです。「それは医者の仕事です。看護のやることはこうです」というふうに役割を規定してしまってそこから出ないことが、生身の人間と付き合う看護師にとって一番致命的です。「Nursing is Nothing」と医者が嫌味のように言ったけれど、それこそが看護なのです。

ですからアイデンティティの危機ではなく、アイデンティティという危機に陥らないように自らどんどん変わるべきです。患者によって変わるべきだし、時代によって変わるべきだし、社会によって変わるべきです。決して自己同一性のようなところに逃げ込まない。それが看護

で一番大切なことではないでしょうか。特に精神科では、看護ケアの暴力性をすごく感じていました。「健康上、患者の1日の喫煙本数は6本まで」「彼らには自己管理能力がないからトラブルが起きないように時間を決めて監視できるところで診る」といったやり方を崩していかないことには自分が望む看護はできなかったのです。

—— そのような状況から CSCD の教員となった今、学生にどうなってほしいといった期待はありますか。

僕は授業でグループワークをしている時のその人との関係はすごく大事にしているのですが、名前も憶えないし学部もなかなか覚えられないタイプです。ですから、ある学生にとってこの授業がどういう意味を持つかとか、それによってどうなってほしいというようなことは考えていません。今ちゃんと話ができているか、相手の言うことをちゃんと聞くことができているか、誠実にしゃべっているか、ということぐらいですね。

—— 授業の中では考えるための素材提供を行ったり、考えるための環境整備のようなことをイメージされていると思うのですが、その教育という部分と、学外で実践されている活動はどうつながっているのでしょうか。

つながっていませんね。授業のネタを探しに学外の活動をしているわけではないので。授業で話す内容は20年以上前の話で、それは結構自分の中で落ち着いてきている事柄なのでしゃべれるのですけれど、今実践していることは下手にしゃべると自分自身の解釈が一つの色に染まってしまうので取り上げません。つまり活動を自分で規定してしまわないよう、訳の分からないままやりたいのです。そういう意味で、外での活動をわざと授業とつなげていないところがあります。

グループワークというやり方が最善のものかと聞かれると、それもよく分かりません。90分間、普通に講義してみたいという気持ちは僕もすごくあります。でもそれは自分の欲望で、大阪大学の学生にとって CSCD のあの授業スタイルは少ないわけですから、学生のためには残すべきだと思います。CSCD でやっている授業は教員の話聞くだけでなく、いろいろな研究科の人たちとぎくしゃくしながら話をしたり、一気に盛り上がったという、やりとりを楽しんでもらうことを看板に掲げているのだから、それで通すべきかと。

—— 授業と学外の活動がつながっていないとおっしゃいましたが、先ほどの「目の前の相手と誠実にしゃべっているか」ということについては、場所や相手とは関係なくつながっているのではないのでしょうか。

つながっていないと言ったのは、それぞれのテーマ、中身のことで。とはいえ、まったくつながっていないわけではない。この前、日赤看護大学で基調講演を頼まれたのですが、「家に帰りたいと認知症高齢者が言った時に何が起きているのか」というお題を与えられていたの

で、「家に帰りたい」ということをテーマに授業をしました。「家」とは何か、「家に帰りたい」とはどういうことかについて皆にしゃべってもらって、それをネタに講演しました。僕にとっては授業も自分とはまったく違う意見や考え方を知る場であり、「どうしようかな?」という時には、話を振って若い人たちの意見をよく聞いています。そういう逆のつながりはあると思います。

出会いと経験が視点を変える

—— 西川さんが学外で展開しておられる実に多彩な活動の一端を具体的にお話いただけますか。

昨日は「大阪ホスピス在宅ケア研究会」の世話人会に行ってきました。これは「日本ホスピス・在宅ケア研究会」という全国組織の大阪府支部で、僕はその理事をしています。2001年には大阪で大会を開き、その前年にはイベントとして、本間さんも一緒に大阪国際会議場で哲学カフェをやりましたね。当時は癌の告知をするかどうか云々でもめていた頃で、僕もホスピス関連の仕事を熱心にやっていました。問題そのものが変わらないので「日本ホスピス・在宅ケア研究会」の活動も最近は落ち着いてきていますが、去年は長崎で「介護福祉部会」と「リビングウィル部会」をしました。大阪ホスピスのほうの研究会はいつも大阪大学中之島センターでやっていて、結構続いているのではないのでしょうか。

—— それは毎年必ずやっているのですか。

そうです。部会がいくつかあり、そのうち僕は2つも担当しています。リビングウィルは死期が迫った時のための事前指示書のようなものですが、日本尊厳死協会が発行するいわゆる「尊厳死の宣言書」に関する問題を取り上げているのが「リビングウィル部会」です。これはただ単に「尊厳死の宣言書」への署名で済ませるのではなく、かかりつけ医とコミュニケーションを取りながらもっと詳細に書き込んでいく新しいリビングウィルの形を作ろうとしたのです。患者家族を巡り、法律家、哲学者、医者などを交えてずいぶん検討しました。自分自身は緩和医療やホスピスなどに携わったわけではないけれど、血液透析の現場にいた時には透析中止の問題を巡って発表していましたし、老健（介護老人保健施設）にいた時は人工的栄養水分補給中止の問題で実際に自分が関わった事例が2例ほどあったので、その経験をいろいろなところで発表していました。

しかしその後、認知症ケアなどに携わっているうちに、だんだんリビングウィルに対する考えが変わってきました。要するに理性を持って自分の終末をあらかじめ指示するというけれど、本当にそれができるのか。人格の同一性はずっと保証できるのか。理性的な時の判断が最も良いと言えるのか。そういった問題において他の理事と意見が食い違うようになったのです。他の担当理事はどちらかというとオランダの安楽死などの先進性を取り入れようという感じで、

方向性が全然違って来たわけです。

—— 考えが変わるきっかけは何だったのでしょうか。

認知症と深く関わってからです。血液透析の現場にいた頃は、生と死の狭間で「何十年も透析で生きてきたけれど、もう止めたい」と訴える患者さんたちに接してきました。でも止めたら訴えられる可能性があるので、延命治療はいったん始めたら止められないのです。本人の意思を聞くどころか、意識のない人に針を刺して透析をする場合もありました。それを家族が良い顔をして見ているはずがありません。それでも何とか透析を終え機械を片付けて戻ったら「亡くなりました」と連絡が入ってきたりする。「もう、ちょっと勘弁してくれ」という気持ちになって、本当に患者さんが望んでいるのかを問題として取り上げて考えるべきではないかという発表もしました。

ところがその後、転職して老健の認知症のフロアで働いたりデイサービスの施設で働いたりしたでしょう。認知症の人と同じように癌で余命いくばくもないという人も見るのですが、そこでの緩和医療は透析の現場とはまったく違っていました。何が違うかということ、医療をどういうふうにするかというようなことではなく、認知症の人は痛みを訴えないのです。癌も末期になって骨にまで転移しているというから強烈な痛みのはずなのですが、不思議なくらい痛みを訴えないのです。機嫌が良かったらニコニコしていたし、食道静脈瘤が破裂して血を吐いて亡くなる最期まで、それほど苦しそうではなかったのです。点滴もせずケアだけで亡くなった人もいました。

医療の現場と介護の現場とは全然違うので単純に比較はできませんけれども、そういう経験の中で考え方がだんだん変わってきました。命の問題を医療倫理の問題としてだけ考えるのではなく、もう少し介護の世界でも考える。さらに、もっと医療や介護とは違う視点、本当は普通の視点で考えなくてはいけないんじゃないかと思い始めたのです。たとえば、病院では医療的にこうすることが正しいとか、この時期に適切な医療は何かとか、まず医療ありきです。老人の場合、要介護状態であれば当然何らか身体的な障害があるわけで、病名を付けようと思えば高血圧だ、白内障だといくらでも付けられます。ところが視点を変えれば、耳が遠いことなどをいちいち「難聴」とはせず「お年寄りだから耳が聞こえにくい」というように医療的に見なくても付き合えるわけです。勉強すればするほど専門性から離れていくような視点の変化です。

そうした中でもう一つの変化は、昨今「宅老所を始めました」という若い人たちが身の回りに集まってきています。細川鉄平さんはご存知ですか。

—— はい。堺で自前のデイケアサービス施設を作って夫婦で取り組んでいる方ですね。私もこの間会いました。

彼らと付き合いの中で、僕もまた彼らから影響を受けるのです。たとえば、彼らの介護職への情熱。鉄平の場合、利用者のお婆さんがご飯を喉に詰めて心停止になり、病院に搬送されたことがありました。彼はむちゃくちゃ悩んで毎日病院へ行き、さらにその人のために拝み屋さんの

ところに行ったり、医療の視点では考えられないことをいっぱいやりました。普通、そんな場合は事故扱いになるのですが、そのお婆さんの娘さんが搬送された病院の医者に「この子たちは悪くないですから警察を呼ぶのはやめてください」と必死になって頼んだようです。そんなこともあって、直接ケアする人間として家族と接するのではなく一歩離れたところから関わるようにもなりました。

そのような流れの中で舞鶴の砂連尾理さんというダンサーとも一緒に活動し始めました。たまたま僕が「とつとつダンス」という舞鶴でのお年寄りたちのイベントに呼ばれたのです。そこで砂連尾さんと知り合い、そこから舞鶴の特別養護老人ホームの施設長ともつながって、毎月砂連尾さんと一緒に施設に行くようになりました。そこではスタッフも施設利用者も地域の人も一緒に、砂連尾さんの行うダンスを皆で言葉にしていくという、今までの認知症ケアとは違う独特のワークショップのスタイルができて上がってきています。

領域横断の鍵は「面白さ」

—— 最初、看護師だった西川さんご自身が介護や認知症ケアとの出会いの中でどんどん変わっていく。でもそれは元のアイデンティティをなくすのではなく、役割を相対化していっておられる、あるいは領域をまたいでいっておられる感じがします。CSCDでは、さらに大学教員というアイデンティティも受け入れておられるわけで、そこにコミュニケーションデザイン・センターが掲げる領域横断の重要なヒントがあるような気がします。つまり、さまざまな役割や職務というものを超えていきながら西川さんは西川さんという人格を完成させていっておられるのだけれど、それを西川さんだけのメリットにするのではなく、他の人たちも共有できるようにするためには何がもっとあればいいと思われませんか。

僕は「面白い」と思うことが大事で、それはどんな分野でも、いくらでもあると思っているのです。最初は僕もそれなりにステレオタイプの考えがありました。でも今では違うタイプの介護職の人と出会って最初は「ん？」と思っても「面白いな」と思い始めると付き合っていけます。釜ヶ崎での活動にしてもそうです。

—— 釜ヶ崎に行き始めたきっかけは何ですか。

釜ヶ崎に「こえとことばとこころの部屋」、通称「ココルーム」というNPOが運営する場所があります。そこの代表で、詩人の上田假奈代さんと僕の嫁さんがママ友になって学童保育の施設を紹介してもらったのをきっかけに付き合っているうちに『「無縁社会における孤立死の問題」をテーマに研究助成を申請しようと思っているのだけれど、西川さんの名前を研究メンバーに入れていいか」と頼まれました。受かるか受からないか分からないと思って了承したところ「受かったから一緒にやってくださいね」という感じで、そこからいろいろ始まりました。

僕以外のメンバーは皆、釜ヶ崎で活動している人たちばかりだったので、最初はそれを見学しに行く案を持っていたのですが、「見学していてもしょうがない。それなら自分で何かやろう」と思い始めたのです。そして自分がやるのであれば哲学カフェをしたいと西成市民館に部屋を借りました。でも「哲学カフェ」という名前では絶対人が来ないと思って「哲学の会」にしたところ、釜ヶ崎のオッチャンたちとの刺激的な出会いが次々と生まれました。さらに CSCD から宮本友介さんに来てもらえるようになったので「もう少し活動を広げてもいいか」ということで同じ西成の「ひと花センター」で「あっこちゃんの会」(注1) というものを毎月1回やり始めました。これは「哲学の会」とはまた違います。

—— それはいつ頃からですか。

宮本さんが来てから1年くらいでしょうか。ひと花センターの運営には、ココルームも含め6つぐらいのNPO が関わっているのですが、そこで知り合った釜ヶ崎のオッチャンの中に一人、癌の末期であり長くない人がいます。藤谷さんという人で、僕のことを「にしやん」と呼んでいるのですが、彼が『「一人」のうらに』という僕の本を読んでくれたのです。孤独を感じた時のことを書いたものですが、それを読んだ藤谷さんが「にしやんのこの本は書ききれないから、『「一人」のうらに』の「そのうらに」っていうのを俺が書いてやる、と言ってノートに書き始めたのです。そのことを假奈代さんから聞いて、僕は藤谷さんに会いに行きました。彼は孤独死予防のために24時間、鍵を締めずにドアを開けていて、訪ねて行くとすぐにノートを見せてくれたのですが、そこには彼の過酷な人生がものすごく丁寧に書いてありました。それで彼が考える「一人」についてのことをもっと聞きたいという話をしているうちに、ふと、以前 ALS 患者の甲谷匡賛さんの映像をアート部門の久保田テツさんと撮ったことを思い出し、藤谷さんを撮ってもらえるのもいいかもしれないと思いつきました。本人に「あなたのことを僕だけが聞くのはもったいないと思うから作品にしたいと思う。映像を撮らせてほしい」とお願いしたら、許可してくれたので今、久保田さんができるだけ都合をつけて一緒に来てくれます。

こうしたことができるのは、彼のことを「面白い」と思えるからなのです。元気な頃はタバコ吸いながら「若い頃はよく釣りに行っていたんや」「僕も釣りは好きです。針はよう結びませんけど」「じゃあ、にしやんが出張に行く時とか、一緒に乗っけてくれよ」などと話していたのですが、その後、癌が見つかってあと3ヵ月だと告知されてしまったのです。それでも抗がん剤の治療を受けて帰ってくると、フラフラなのにわざわざ「あっこちゃんの会」に来てくれる。その心意気を感じて釣りに誘って一緒に淡路島に行ったりする中で「あっこちゃんの会」だけでなく、もう少し付き合ってみたいと思うようになる。相手に対する興味、関心が強まってくることが、常に僕が動くときの理由です。

「あっこちゃんの会」は「大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの西川勝と宮本友介」という肩書きで活動していますので、皆が僕のことを「西川先生」と呼ぶ中で、藤谷さんだけは「にしやん」と呼びます。デイサービスに従事していた時もそうですけれど、僕のことを看護師だと認識できない認知症の人が「にいちゃん」と呼んでやってくると、僕の看護師

としての在り方が変わるので。自分が考えて変わるのではなく、相手に変えさせられているというか、魅力的だと思える人と付き合うといつの間にか自分が変わっているという感じだと思います。

—— 大学という枠組みからは難しい実践かもしれないですけど、西川さんの活動は一つのモデルとして、ご自身が思っている以上にいろいろな人に刺激を与え続けていると思うのです。その社会的意味や役割がもっと評価されてもいいのではないかとお話を聞いていて思いました。ご活動はいわゆる学問としての哲学でもなく、あるいは単なる個人の生き方でもなく、たとえば上田假奈代さんなどのような若手や中堅の現場ですごく面白いことをしている人たちに注目されている。それは従来の学問の内部での評価では絶対に追いつかない。

ここで CSCD のことに話を戻すと、将来、研究者を志したり社会で活躍していくであろう人たちと関わっていくのであれば、西川さんのような在り方を視野に収めておくことは非常に有益だと思います。

(2014年6月19日 CSCD にて)

注釈

- 1) 2013年7月から西成区の委託事業である「単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」(通称・ひと花プロジェクト)の中で、表現プログラムの一環として実施している「アジール呱呱の声」の通称。